

学長室だより

2018.6.18 NO.10

「わらび座」の心地よさ

仙北市にある「わらび座」は終戦直後からの歴史を持つ。秋田の「田舎」に本拠をおきながら全国規模で演劇活動を行い、時には海外公演を実施するなど、考えてみると不思議な存在である。

3年ほど前にわらび座からのご招待で観劇の機会があり、実に心温まる懐かしい気分に入った。演劇と言えば、都会の劇場で観客大衆を集めて悲喜劇を演じ、観る方も心を引き込まれて疲れるといったような状況を想定するが、わらび座はその定義には当てはまらない。とにかく温かいのだ。劇場のある場所も田畑に囲まれ、広告もあまり目にしない。

私は栃木県的那須地方の生まれだが、もう60年も前の小学生のころ、通っていた黒磯小学校にわらび座が公演に来たことがあった。劇の題目などは忘れてしまったが、俳優たちが「山賊の歌」というのを歌うシーンがあり、子どもたちも促されて俳優らと一緒に歌ったと記憶している。

演じられた劇そのものは、都会的なスマートなものではなかったろう。それでも大勢の演じ手が繰り広げる本格的な演劇を生まれて初めて見る子供たちにとっては衝撃的だった。

ところが、1時間以上にわたるストーリーの劇を見るには子供たちの関心や忍耐力は持たなかった。観劇の途中で子供たちの私語や身勝手な行動が大きくなり、劇の進行にも支障をきたすほどになった。とうとう、たまりかねた演じ手たちが劇を中断して「静かにしてくれ」と制止する始末になってしまった。

何とも困ったことになったものだが、テーマが大人のロマンスだったので、今考えると小学生に静かに鑑賞しなさいというのも無理なことだったのかもしれない。演劇が終わった後、座長さんとおぼしき俳優が子供たちの前に来て演劇を鑑賞する心構えをひとしきり説いてくれた。

そのあと、私たちは各クラスに戻って反省会を開いたのを覚えている。そんな遠い昔のことを思い出しながら劇を見てみると、突然、ある思いが浮かんだ。「そうだ、わらび座は60年前と変わっていない。その証拠に、この心温まる雰囲気と、わき起こった感覚はあの時のものと全く同じだ」

その時、瞬間的ではあったが、60年前の感覚と現在の感覚がぴったりと重なり合った。演劇は人間の起伏のない普通の生活を演じるだけでは劇としては成り立たない。起伏の激しい喜劇や悲劇を題材にしなければならない。そのうえで、観客に劇中の人物の心理や感情の中に自己投入させ、追体験させてこそ成功するのである。

いまは、そんな起伏の激しい心理や感情を観劇を通じて体験することはもう疲れるので、遠慮したい年齢になってしまった。わらび座の温かい心地良さが、ちょうどいい。



鈴木 典比古

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からご覧いただけます。
<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MTW20180618051550001.html>